

★パパのロケット

福博士

アポロ計画が中止になった。

ボクは、少し前にパパに連れられて行った万博のアメリカ館で、炎天下を何時間も並んで見る事ができた月の石を思い出した。

でもアメリカは、月ロケットを一回飛ばすおカネがあれば、いくつもの病院を建てられるのではないか？という世論が大きくなり、ついにアポロ計画を途中で止めてしまった。

このまま宇宙開発が続くと、毎週見ているテレビのサンダーバードみたいなのに、すぐにでもみんな月や火星に遊びにいけると思っていたのに。

宇宙が大好きなボクは、とても残念に思った。

そんなある日、パパがお土産を買ってきた。

「ほら、ロケットだぞ！」

「わー、すごいよパパ。これ月まで行くのかなあ」

ロケットの箱絵が描いてある、大きな模型の箱だった。

アポロとは少し違う形のロケットの絵だ。

「アメリカじゃないのかな？」

箱をよく見ると、見慣れないロシア語が書いてあった。

「ロシア語だよ！ほら！」

ボクは押入れに大事にしまっていた「今日のソ連邦」という雑誌を、パパに見せた。

万博のソ連館でもらったものだ。

それと同じ文字が書かれてあった。「CCPR」

「ソ連だ、ソ連のロケットだー。すごい！」

「こんなのどうしたの？高かったんでしょ？」

ママが呆れた顔できいた。

「飲み屋からの帰り道に、団地近くの暗い路地裏で露天商が売ってたんだよ。意外と安かったんだ。教育玩具キットとかで、組み立てたら実物そっくりに打ち上げられるらしいぞ」

「えー、すごい！実際に飛ぶんだ！ねえ早く組み立ててよ！」

ボクは興奮した。

「待て待て」

箱を開けてみると、大きなパーツがいくつも入っていた。

箱が重いと思っていたら、金属製の部品もいっぱい入っていて、本格的だった。

いつも買っている学研の「科学」に付いてるフロクよりもしっかりした部品だった。

団地の小さなちゃぶ台の上に部品を広げてみた。

確かにロケットだった。

先つちよに小さな宇宙船？が乗っている形だ。

万博のソ連館で見たポストロークロケットにそっくりだった。

ガガーリンの乗ったやつだ。

金属製の部品を組み上げると、一m三〇cmにもなるらしい。

「大きいんだね！ボクの背丈みたいだ」

箱の底に日本語訳の解説書が入っていた。

広げてみると、直訳っぽい珍妙な拙い日本語で書かれていた。

入っているハガキを製造元に送ると、会員登録されて、より

詳しい解説が来るとのことだった。

解説書だけではよく判らなかつたので、とりあえずパパは送っ

てみることにした。

何かロシア語の注意書きらしきものがあつたけど。

それからパパは、何日もかけて組み立てていった。

パパは、毎日会社からまっすぐ帰ると、ちゃぶ台の上で真剣に

組み立てていた。

中身の推進剤も、薬局などから取り寄せた。

解説書には薬剤の買い方も書いてあつた。

小学校の図書館にある図鑑で調べたら、ソ連独特の「ガラス
タータイプ」というロケットだそうだ。

アポロのサターンロケットとは違って、小さい噴射口のたくきん
ついた五本のブースターを一本に束ねた形をしていた。

細かい金属部品を精密に組み合わせる必要があつたけど、一

つ作れば同じ方法でいくつものエンジンを作る事ができた。

裾の方が深緑色のスカートをはいた女の子みたいに広がってい

る。

ボクはロケットに「アンナちゃん」と名前をつけた。

前から妹が欲しかったんだ。

上の方の段には、複雑な電気部品を組み込むようになってい
た。

パパは若い頃から鉱石ラジオを作っていたので、微妙なハンダ付

けはお手の物だった。

足りない部品はわざわざ日本橋にある電器屋へ買いに行っ

た。

日本製のトランジスターが必要らしかった。

だいたい組み上がってきたある日、突然不思議な女の人が我

が家にやってきた。

女の人は玄関で敬礼した。

「ソビエト社会主義共和国連邦陸軍戦略弾道防空司令部

極東方面軍作戦室関西支局企画部第三営業課所属のアツ

コ・テレシコワです」

どう見ても、背の低い、メガネをかけた普通の日本人のお姉さんにしか見えない。

日本語を話しているが、見かけないカーキ色の軍服にタイトスカート、赤い旗のバッジをつけている。

「コロリヨフ司令の命で、発射管制の補佐に参りました」
「どうやら、彼女がロケットの打ち上げを手伝ってくれるというのだ。」

「はああ。こりゃあ本格的だなあ。ホンモノみたいだ」

パパは笑いながら、部屋に通した。

「どうぞお構いなく」

お姉さんは丁寧に靴を脱いで、六畳の部屋に上がりこんだ。
ちやぶ台の前に座って、アタッシュケースを開け、何やら小型の装置やら地図やら計算尺を出して来た。

ボクは少し心配になった。

「パパ、この人、軍人さんなの？」

「うん。ソ連では軍隊が宇宙ロケットを打ち上げてるんだよ」

「あ、そーか。ガガーリン飛行士も元パイロットで、少佐だったもんな。すごい！まるでホンモノだ！」

お姉さんは出来上がりつつある「アンナちゃん」を感心して見あげた。

「さすがによくできてますね。細かいところまで仕上げられ

ています。やっぱり日本人はすごい」

「パパはちょっと照れていた。」

「ロシア人が作ると、ちゃんと飛ばないんですよー。嬉しいです
ね」

お姉さんは「アンナちゃん」のあちこちをノギスで測ったり、先の電気部品をテスターのようなもので調べたりした。

それから、そのお姉さんは毎夕やってきて、パパと相談しながら、「アンナちゃん」の細かい調整をして、ママの作った夕食を一緒に食べたあと帰っていった。

ボクは一度夕食の後、お姉さんに、一緒にトランプで遊ぼうと誘ったのだけれど、あっさりと断られた。

「いえ。任務中ですから」

数日後、ようやく「アンナちゃん」は完成した。

最後にお姉さんは、先っちょにある尖ったカバーをはずし、中にある宇宙船？のフタを開けた。

分厚い手袋をした手で、アタッシュケースから丁寧に取り出した小さな鉛色のカプセルを中に入れ、またフタを閉じ、先端のカバーをしっかりとめた。

「今のは何？」

「再突入体です」

珍しくお姉さんは微笑んだ。

「これで熱遮蔽は完璧です。無事に目標に到達できるでしょう」

お姉さんの笑顔を見ると、ボクも何だか嬉しくなった。

出来上がった「アンナちゃん」の丸い胴体に、パパとボクは極太マジックで、サインと応援文を書いた。

「アンナちゃんへ。完成おめでとう！月へ行っても忘れないでね」

ボクは「アンナちゃん」の胴体を抱きしめた。

「ママー、早く打ち上げようよ」

「パパに聞いてからでしょ」

「パパー」

「よおし、じゃあご飯を食ったあとにいよいよ打ち上げだ！」

お姉さんはウチの黒い電話を借り、何かロシア語で話していた。

「じゃあ、よろしくお願いします」

「間違えないでね」

ボクの家族とお姉さんは息を飲んで、ちゃぶ台の上の「アンナちゃん」を囲んだ。

「アンナちゃん」は、とても神々しく見えた。

「ねえ、これ月に行くの？」

お姉さんは首からかけたカギで、小さな黒い箱をあけ、中のカードにタイプされた暗号文に目を通した。

そしてもう一つの箱についた小さなダイヤルを回して番号をセットした。

「いえ、目標はワシントンD.C.です」

「ふーん、それどこ？ヒューストン？ケープケネディ？」

「アメリカだよ。ああ、ワシントンの上空を通過して月に行くんだな」

パパは知っているらしかった。

「わぁー、すごい！」

お姉さんは、ボクの勉強机の前の壁に貼った世界地図を指でなぞった。

「今発射すると、こういう軌道を取ります」

日本から太平洋上に、なだらかなカーブを描いて、アメリカを指した。

「北極圏の北米防空網を回避します」

お姉さんは、小型の装置を2台セットした。

これがロケットの打ち上げ装置らしかった。

「これ、合図したら同時に回してもらえますか？」
小さなレバーのついた片方の装置を、パパの前に置いた。

「パパすごい！」

「よおーし。がんばるぞー！」

パパは腕まくりをして、真剣な顔で小さなレバーを握った。

お姉さんは、ごつい腕時計で時間を確認して、カウントダウンを始めた。

「発射十三秒前。ツェルプ、イレブン、テン……」

「あれ？英語なんですか？」

お姉さんは一瞬顔をしかめた。

「本来カウントダウンはしません。判り易くするため……」

……ファイブ、フォー……」

「ぞーなんだー」

「ツー、ワン、ゼロ！発射！」

お姉さんと同時に、パパもレバーを回した。

ちやぶ台の上のロケットブースターから火が出た。

ゴォーっ！！バリバリバリ！！

振動でフスマが揺れ、食器棚のガラス戸がビリビリ震えた。

オレンジ色の炎を噴いて「アンナちゃん」は、六畳の間に浮かび上がった。

白い煙が狭い団地の一室に充滿した。

「やったー！」

キレイな光景だった。

ホンモノのロケット打ち上げそのものだった。

が、

「あー！」

ごん！

「アンナちゃん」は、程なく団地の天井にあたった。

何度も、天井に突き当たった。

まるで、大きくなったタケノコが天井に突き当たるように。

「あ、いかん！忘れてた」

「窓、窓！早く開けて！出たがってるから」

ボクは、慌ててベランダの窓を開けた。

家族みんなで、煙と一緒に追いつくようにしてウチワであおぐと、「アンナちゃん」は窓から出、ベランダから先の空中へ出た。

「大丈夫かな？」

「アンナちゃん」は、オレンジの炎を噴いたまま、フラフラとバランスを崩して、力なく団地の3階の高さで空中を上下している。

「大丈夫です。このまま放っておけば内蔵しているジャイロ機

構によって正しい軌道を描くはずです」

お姉さんは眩しそうに炎を見つめながらそう言った。

やがて「アンナちゃん」は、姿勢を正すと、自分の使命を思い出したように、夕闇の中をフラフラと上昇していった。

家族全員で窓からその姿を見送った。

「あがったぞー」

「やったー」

「がんばれよー」

「がんばれー！アンナちゃん！」

パパもママもボクも泣いていた。

夕闇の中、徐々に上昇速度を増した小さなロケットは、オレンジの炎を力強く吐きながらやがて小さくなり、大きな弧を描いて、空のかなたへと消えてゆこうとした。

ベランダから見える空の一番端で、「アンナちゃん」から花が開くように光の点が四方に広がった。

ブースターを切り離れたらしい。

それはまるで、別れ際に「アンナちゃん」がボクたちに手を振ったような気がした。

そして、見えなくなつた。

「アンナちゃん、月へ行っちゃったー」

「お世話になりました。それでは私はこれで」

軍服のお姉さんはアタッシユケースをしまい、暗号文をペラングで焼いた後、敬礼して帰って行った。

「作戦は終了です」

それから何日も経った。

あれからロケットはどうしたんだろう？

新聞でもテレビのニュースでもロケットが月に到着したとは報道されていない。

ボクが残念そうな顔をしているのが気になったのか、パパはまたお土産を買ってきた。

「ほうら、またロケットだぞー」

箱には中国語が書かれていた。

(終わり)1st:2005/5/18 2nd:2013/4/11